＜コラム＞

エイムズ唯子の「心理学の周辺」

第15回：「春のごあいさつ」の巻

フランス田舎風カフェ「NILS」in 桐生にて

４月を迎え、私の職場にも新しい教員や職員のみなさんがやってきました。大教室で前に立って緊張し「エイムズと申します、えぇと、苗字はカタカナです。」と間の抜けたごあいさつをしたのは８年前のことになりました。今回は、印象にのこった今年の「新任のあいさつ」を３つピックアップしてご紹介してみたいと思います。

同じ法人内に幼稚園があるので、新しい保育士さんたちが毎年何人か着任されます。女性がほとんどなのですが、彼女たちのあいさつはういういしさにあふれていて、いつも楽しみです。今年はそのうちのひとりが、「子どもたちの目線に立って仕事をしたい」とあいさつしました。ひざまずいて、小さな子どもの目をまっすぐに見つめているその保育士さんの姿が浮かびました。年功序列式なのか、新任者の紹介はいつも大学からはじまり、幼稚園は一番最後です。「ご指導、ご鞭撻を」といった紋切り型のいかめしいご挨拶が延々と続くと、つい引きずられてしまいそうに思います。自分の言葉で話すことは勇気が必要ですが、その心意気の大切さを、若い保育士さんから教わりました。

次は、ホテルの宴会場に場所を移した歓送迎会の席でのごあいさつ。新任者は、乞われてふたたび段上の人となります。薬学部に入った男性の教員はこんな口上を述べていました。「いままでは薬局で薬剤師として働いておりました。教員ははじめてなので、ご指導をよろしくお願いします。ただ、できましたらお叱りは、一枚オブラートに包んで頂けると嬉しいです。」

昼間のごあいさつについで２巡目ですから、すこしリラックスしたのでしょうか。薬学部の教員ならではのジョーク。ですが、残念ながら会場の反応はいまいちだったようです。かくいう私自身も、個性的なあいさつを歓迎しつつ、「あんまり強く言わないでね」って最初から相手を牽制するのは、どうなんだろう…多少厳しくても、はじめにしっかり教えてもらえたほうが、結局は自分の得になるんじゃないかしら…口に苦かろうが、薬の効き目は同じだといいたいのかな…とあれこれ考えてしまいました。

最後は、看護学科に着任されたベテラン教授のごあいさつ。「１年先を見るなら種をまけ、10年先を見るなら木を植えよ、100年先を見るなら教育をせよというそうです。私はこれまでの経験を活かし、本学でも教育活動に尽力して参る所存です」。隣に座っていた同僚と「カッコイイね…！」と思わずひそひそ。100年後といったら、今日産まれた子どもが100歳になっているということですから、私が今向き合っている（つもりの）学生たちも、とっくにこの世を去っています。

医療や福祉の現場で、人間の命をどう支えるべきかという根源的な問いを、教師と学生が共有し、つきつめて考え、学び合い、高め合ってゆくことができれば、それはかならずや受け継がれ、社会をよりよい場所にすることにつながるのです、というメッセージは、春休み気分の抜けない私にビシリと刺さりました。どんなに厳しい冬のあとでも、時がくれば花をつけ、若葉を芽吹かせる桜の木を信じるように、自分が教育とよぶものを信じて、この１年もまた一日ずつ、一歩ずつ、です。

（高崎健康福祉大学准教授、フォーラム共同研究者）